

【日本語を漢字だけで書いてみると・・・】

奈良時代以前の日本語は、固有の文字を持ちません。書き留めることが求められると、漢字だけを使って記す文化が育まれました。万葉仮名まんようがながその代表です。『万葉集』巻七には「摂津にして作る」と題した中に、次のような歌が記されています。

命幸久吉石流垂水々乎結飲都

一一四二番歌

五七五七七で読むことを考えると、どこで区切ったらよいものか……。初句を「命」だけで捉えてみると、「いのち」に二文字を読み添えます。「命幸」と二文字で読んでみると、「いのちさきく」と字余りになります。うまく読み通すことのできない歌を、私たちは難訓歌と呼んでいます。幾通りかの読み方が試されていますが、仮に「命をしさきく（久）吉よけむと石いはばしるたるみ流垂水の水を結びて飲みつ（都）」と読んでみましょう。「（私の）命が無事で良い状態にありますようにと（祈りながら）、岩の上を勢いよく流れ落ちる滝の水を、（手で）寄せ合わせて（すくって）飲みました」と訳すことができます。作者は旅の道中なのでしょうか、自らの命が健やかであることを、激しく流れ落ちる滝の水を飲んで、祈願したことを歌にしています。

「垂水」は滝の普通名詞ですが、地理的な特徴は地名にもなります。吹田市には垂水町を探すことができます。垂水神社には、『万葉集』から志貴皇子（しきのみこ）の歌（巻八・一四一八番歌）が、碑として建立されています。また、神戸市には垂水区を見つけられます。平磯緑地には何首もの万歌碑が建立されていて、一一四二番歌も読むことができます。

作者はどこの水を飲んで、命をつなぐことを願う歌を詠んだのでしょうか。

【『City Life』 2019年12月号掲載】